

創立者福田昌子のことばから導き出される 純真短期大学こども学科の教育

徳安敦⁽¹⁾、松尾麻紀⁽²⁾、渡部明⁽¹⁾、田中美江⁽¹⁾

On educational policy and contents based on interpretation of the founder's description

By

Atsushi TOKUYASU・Maki MATSUO・Akira WATANABE・Yoshie TANAKA

目次

- 1 はじめに
- 2 研究の目的と方法
 - 2-1 目的
 - 2-2 方法
- 3 こども学科の教育目標への示唆
 - 3-1 子どもの権利、人格を尊重する保育者
 - 3-2 すべての人の不安のない、明るい生活を願える保育者
- 4 こども学科の教育内容・方法等への示唆
 - 4-1 人間らしい生き方
 - 4-2 日本の心のふるさとを尋ね、近代科学の進歩に遅れず、長所を生かす
 - 4-3 体と心と呼吸を整える
 - 4-4 人間のもっとも美しい姿をしっかりと見て勉強する
 - 4-5 助け合う温かな教育環境
- 5 おわりに

受理日 平成 26 年 12 月 5 日

(1) 純真短期大学こども学科 教授

(2) 純真短期大学こども学科 准教授

1 はじめに

純真短期大学は1957年に、創立者福田昌子によって設立された短期大学である。現在「気品」「知性」「奉仕」の建学の精神のもと、食物栄養学科とこども学科の2学科で構成され、いずれも、人間の幸福のために寄与する人物を、専門の分野から育てるという使命を持った学科である。

こども学科は2006年に開設され、時代の声に呼応する人材としての保育・教育者の育成を目指してきた。間もなく10年目を迎えようとしているが、振り返ればこの間は、専門職としての保育・教育者をはじめ、子どもやその家族を取り巻く環境が著しく変動した時代であったともいえよう。

保育所保育指針と幼稚園・小学校教育要領の改訂や、教員免許更新制度、認定こども園の施策とそれに伴うカリキュラムの改正、子ども手当の交付、そして子育て支援の強化とともに待機児童解消を目指した子ども・子育て新制度の策定など、国会での議題に子どもの保育・教育と保護者への支援対策案が顕著に見られた時代でもあった。

この背景には国の財政からの一元化への働き、すなわち国庫から一般財源化といった財政措置と、働きやすい、あるいは産み育てやすい環境を整えることによる少子化対策への国の動きがあることは周知のとおりであるが、直接子どもに関わる現場の保育・教育者は、保護者のニーズと行政の狭間で翻弄し、混乱を引き起こすこととなったのも事実であろう。

これら国の動きはまさに国民が各々おかれた現状から発した窮迫の声の結果ともいえるが、制度が変わったといえども、子どもの育ちを保障する担い手は現場にいることの重要性を忘れてはならない。

本学園の創立者福田昌子が生きた時代もまた、緊迫した世界情勢のなかで教育の重要性が唱われた時代であった。

かつての福岡市長の薦めから35歳という若さで時代の要望に応えるべく国会に参じた昌子の勇気と気骨な精神は、彼女が残した筆跡から、今でも熱く伝わってくる。虐待、少年犯罪、引きこもり、いじめなど現代の社会状況は子どもにとってまさに受難である。この現状のなかで繰り返される保育・教育現場では、いったいどのような人材が求められているのだろうか。

混乱の時代にあってこそ花開く精神とその醸成について語った創立者のことばを紐解きながら、後世もなおその建学の精神を受け継ぐ者として、改めて創立者の教育観や人間観に触れることで、学科としての教育の在り方を再考したい。そして、本学こども学科が求める保育・教育者像とその養成の在り方を、教育の目的、内容、環境の側面から明らかにすることで、子どもにとって最善の保育・教育者養成を目指したい。

2 研究の目的と方法

2-1 目的

建学にあたっては、創立者の熱い思いがあったであろう。創立者が学校教育に携わっている間は、日々の言葉や姿を通して直接的にその思いが教職員に伝わったはずである。昭和50年12月に創立者福田昌子先生が逝去された後は、当然のことながら直接的に思いを聞くことができなくなる。直接的な薫陶を受けた人が多くいる間は良いが、次第に少なくなり、創立者と直接的にかかわったことのない教職員が増えるにしたがって、創立者の願いを実現していくことが困難になっていく。そこで、創立者の息づいたことばに触れることにより、創立者の願うこども学科の教育について考察を行い、その実現へ近づけていくことを目的として本研究を行う。

2-2 方法

これまで、福田昌子のことばは、あまり体系的に整理されてきていない。そこでまず、福田昌子のことばの収集と経年的な整理を行った。中心となったものは、純真女子高等学校（現純真高等学校）及び純真女子短期大学（現純真短期大学）の卒業アルバムに書かれていた創立者のことばと福田学園（現純真学園）新聞に書かれていた創立者のことばである。創立者福田昌子のことばの中から、純真短期大学こども学科の教育に結びつくと思われることばを取り上げ、創立者の思いに寄り添いながら、その教育の在り方について検証を行った。具体的にはそのことばの出自に関する根拠を明らかにし、そのことばが純真短期大学のこども学科の教育にどのような示唆を与えるのか、またどのような教育を行っていけばよいのかについて考察を行った。

3 こども学科の教育目標への示唆

純真学園は「人間及びその社会をよりよい方向に変革しうる人材の育成」を目的として設立され、「時代の要望に即応し、高い知性と豊かな情操とをもって、社会、家庭に歓迎され、敬愛される良識ある人材を訓育するため」に、その教育方針として、「気品」「知性」「奉仕」の学園訓を掲げてきた。本学園が設置されて半世紀を超える年月を経た現代にあって、「社会を変革し得る人材」とは如何なる人材であろうか。学園訓に裏付けられた創立者の思いを受けて、まさに変革期を迎えようとしている現代における本学科の教育目標を再考するとき、創立者のことばから示唆されるものについて改めて検証したい。

創立者福田昌子が教育理念について直接語った貴重な文章が、昭和45年1月25日に刊行された福田学園新聞第2号1面に記載されている。学長のことばとして「70年代の若人に期待」と題されたその文章には、戦後の教育に忘れられかけた「人間形成」への警鐘として、教育で最も肝心なことが「何よりも人間性豊かな良識ある人を育てる」ことだと強く訴えている。昌子の言う「人間らしい生き方」とは何か、「広く豊かな教養を身につけ、社会を、文化を、生活や環境を高い立場から総合的に見ることの出来る知性を持ち、知識として頭で理解するだけでなく、身体でおぼえ、態度で表現することです。そしてまず己れに厳しくなければならぬ」と昌子は言う。明治近代教育から少しずつ浸食してきた専門分化へ

の懸念から、「総合化への転換期」が訪れていることを予兆しながらも、昌子は「世の中に役立つ人間」を育成するための根幹には、「情操を高める」ことと「強い意志の養成」を目指さなければならないことを痛感していた。ここに学園訓である「気品」「知性」の根拠が見える。すなわち、幅広い教養と知識に裏付けられた判断力を以て、物事を総合的に俯瞰・分析できる「知性」と、自己を律する厳しさと節度を根底に、美的・道徳的情緒を兼ね備えた「気品」である。頭だけの理解に留まらず「身体でおぼえ、態度で表現する」ことの意味は、教養や知識が参考文献として終始するのではなく、言動を左右する基盤として、その者の一挙手一投足から滲み出てくるものでなければならないことを指している。そこはかたなく漂う「気品」とはここから生まれるのだろう。厳しい時代を生き抜いた昌子の気骨とその精神は「他人の言動に付和雷同せず、各自がそれぞれの長所を生かす根性の人間になってほしい」ということばからも伝わってくる。いかなる時代にあっても「世の中の役に立ちたい」という思いを掲げながら社会に参加しようとする意欲と勇氣、そして信念を持つことが、社会に貢献し得る人材、もう一つの学園訓である「奉仕」に繋がるのであろう。

上記のような時代に警告する創立者の教育理念を裾野に本学科の教育理念を鑑みた時、わが国の将来を支える人格者を教育するという不動の責任と、その時代が求める専門職を養成することの変様性を兼ね備える必要があるだろう。現代は家庭生活の中における子育てに関わる時間が激減している。働きやすい環境と、産み育てやすい環境が理想とされるなか、現保育所保育指針で強化されたように保護者支援の必要性が増しているのが現況である。そのことが保育・教育者の在り方として問われるならば、支援する側である保育・教育者自身が対象者に向き合う前に、自己を確立する必要がある出てくる。他者を「支援する」ためには、支援者の精神的自立が言動の磁力となるであろう。

3-1 子どもの権利、人格を尊重する保育者

(1) 言葉の根拠

昭和 25 年の国会法務委員会における発言の中で、10 歳男児の誘拐事件の解決に奔走する両親の姿を取り上げ、町に起こった小さな些事かもしれないが、子どもを取り巻く事件に対しても、取り組みを重要視してほしいことと、メディア（当時はラジオ）をはじめ民間も門前払いをするのではなく、事件解決につながるよう真剣に協力してほしいということについて要望している。両親の必死の思いを受け止めて、弱者に優しい社会へと変えるべく、国会で意見を述べる姿勢に、人や社会に対する創立者の姿勢をうかがうことができる。

この中に出てくる、人権や人格の尊重に繋がることとしては、「新しい憲法のもとにおいて人権が尊重され、人権の保護を受けている」「憲法において人権擁護が叫ばれ、また児童保護のため児童福祉法、あるいは少年法ができた」「人権擁護、人の命をいかに大切にするか」を挙げることができる。

(2) こども学科の教育目標への示唆

保育者は当然のことながら、子どもの人権を擁護していく立場にある。子どもの最善の利益を第一に考えてその職にあたらなければならない。子どもを取り巻く家庭や社会の環境が不安定な今、保育者の持つその使命は一層大きなものがある。従って、子どもが置か

れている現状と望ましい姿を学生が理解をし、保育者や地域がどのように援助をしていけば、子どもの人権が守られていくのかについて、深い理解と実践への心と技術の養成が求められるところである。

（３）具体的な教育目標

学生が子どもの人権を大切にする保育者として育っていくに当たっては、次のような目標が達成されなければならないであろう。

- ・ 日本国憲法をはじめ、子どもの権利条約（児童の権利に関する条約）児童憲章、教育基本法、児童福祉法など、子どもの権利が謳われている規定をできる限り深く理解すること。
- ・ 一括りの子どもではなく、一人ひとりの子どもへ心を注ぐことが出来ること。
- ・ 物質的、表面的な平等感ではなく、それぞれの人間が存在して、そこにいることが、平等であり素晴らしいと思える価値観を持つこと。
- ・ 子どもの生命の安全、心身の健康な発達や維持は、保護者に第一義的な責任があるとしても、社会全体の責任でもあり、直接かかわる保育者の責務の大きさが自覚できること。

（４）今後の課題と考察

種々の規定を知っているということだけでは、試験は高い点数が取れたとしても、実際の場面では生かされてこない。できるだけ、実習などでの具体的事例との出会いの場面で、子どもの生きている姿や、いとおしく思えることに、深く結びつく体験が求められるところである。そして、子どもたちや他人が自分と同様に、尊ばれるべき存在であるという実感を持つことがさらに求められる。

３－２ すべての人の不安のない、明るい生活を願える保育者

（１）言葉の根拠

「真面目に働けば人間らしい生活が出来、病気や外傷をしてもどんな貧乏な人も自分の懐具合を心配せずして、十分な治療が出来、又不幸にして子供をかかえた未亡人になっても、少なくとも最低生活は国が保障してくれ、寄る辺のない老人になっても、楽しい養老院で老後を豊かに暮せる様な社会を作りたいのであります。私達の生活を一日も早く明るい安定した生活にしなければなりません。その為には広い視野と勇気が必要になります。

私は皆様方と共に・・・安定した明るい生活の実現の為に手と手を取って努力致したいのであります。あくまで頑張りたいのであります。」福田昌子の切なる願いが伝わる『私達の生活と政治』に書かれたことばである。

（２）こども学科の教育目標への示唆

保育者は主に子どもを対象とした職務なので、このことばとは少し遠いところにあるように感じるかもしれないが、その子どもたちこそが、次世代の生活や社会や文化を支え作り出していく人々であり、保育者は、今、その大きな責任の上に立っていることを忘れてはなるまい。子どもたちが将来、お互いに手と手を取り合って、不安のない、明るく、人間らしく生きていくことができるような、社会の一員として育っていくために、保育者は子どもの周りにどのような文化や生活、ものの見方や考え方を用意していかなければなら

ないのか、深く考えておかなければならないであろう。そのためには、環境としての保育者自身が、少なくともそのような文化や習慣、価値観の育成に大きな影響を与えているという自覚が求められるであろう。できれば、自信と勇気をもって実践できるものを持つことが望ましいといえる。

これらのことは、サービスとしての付加的事項ではなく、教育基本法の第6条に「法律に定める学校は、公の性質をもつものであって、国又は地方公共団体の外、法律に定める法人のみが、これを設置することができる」となっているように、その公の性質の幼稚園に勤める保育者も公の性質を持っており、国民や社会に対する当然の責務であり働きであると考えられる。

（３）具体的な教育目標

具体的には４－１で取り上げる、福田学園新聞第２号「70年代の若人に期待」に出てくる「広く豊かな教養を身につけ、社会を、文化を、生活や環境を高い立場から総合的にみることの出来る知性を持つ」ということになるろう。

（４）今後の課題と考察

失われていく文化、創られていく文化、これからの社会に、どのような文化や生活や環境が求められるのかは、変化している現代ではいよいよ見えにくくなっている。だからこそであるが、福田昌子の言う「人間らしい生き方」「不安のない社会」「明るい社会」「朗らかで楽しい家庭生活」「お互いが手と手を取り合う社会」とはどのようなものなのか、という問いかけから模索することが、重要になると思われる。

４ こども学科の教育内容・方法等への示唆

４－１ 人間らしい生き方

（１）言葉の根拠

福田学園新聞第２号「70年代の若人に期待」と題した文章の中に、「人間らしい生き方とは、広く豊かな教養を身につけ、社会を、文化を、生活や環境を高い立場から総合的にみることの出来る知性を持ち、知識として頭で理解するだけではなく、身体でおぼえ、態度で表現することです。そしてまず己れに厳しくなければならぬ。」と書かれている。

（２）言葉とこども学科の教育内容等への示唆

保育者には、人間らしい生き方を身につけて、子どものモデルとなることが求められるであろう。そのために広く豊かな教養を身につけなければならないことは当然であるが、モデルとなるには、身体でおぼえ、態度で表現することができて初めて、子どもの目に届きやすいこととなる。この態度が育つには、自己の意識が大きく作用することを考えると、態度が身につくためには、己に厳しくなければならぬということになる。

（３）具体的な教育内容

教職課程や保育士養成課程そのものに、教育思想、教育史、教育哲学、道德教育や倫理学、日本国憲法をはじめとする教育法規、社会制度、人間の発達や心理学、音楽・美術などの芸術、健康や体育、福祉や社会学、自然科学、情報技術、英語コミュニケーションなどの広い教養が含まれている。これらに加え、一般教養科目の中で礼法マナーや文章表現法、純真ゼミナールなどが実施されている。それぞれの科目に合わせて、講義、演習、実技の授業形態をとっている。そして何よりも大切なことは、教科教育以外における、学校生活で培われる思想や人間性や振る舞いであろう。そのための行事や、教職員の対応、教職員が醸し出す雰囲気などの環境も大きな働きをすると思われる。

（４）今後の課題と考察

人間らしい生き方がそれぞれの人の中で育ち、それぞれの人に合った態度として表現されていくことは、土にまいた種がやがて花開くのと同じように、豊かな土壌を作ることから考えていかなければならないことと、時間をかけて醸成されていく視点と育ちの視点を持つこと、さらに、出会いの瞬間を大切にし、その積み重ねが、育ちの力になっていくことを教員が自覚し、意図的に取り組むことだと考える。

4-2 日本の心のふるさとを尋ね、近代科学の進歩に遅れず、長所を生かす

（１）言葉の根拠

福田学園新聞第2号「70年代の若人に期待」と題した文章の中に、「広く深い社会的視野に立って何千年と続いた日本の心のふるさとを尋ね、しかも近代科学の進歩におくれず、鋭い判断力と分析力によっていたずらに他人の言動に付和雷同せず、各自がそれぞれの長所を生かす根性の人間になってほしい」と書かれている。

（２）こども学科の教育内容等への示唆

ことば全体としては、育ってほしい人の姿が示されている。その中の「広く深い社会的視野」については、すでに考察してきたところであるが、それに続く「何千年と続いた日本の心のふるさとを尋ねる」「近代科学の進歩に遅れず」「それぞれの長所を生かす」について検証したい。

- ① 何千年と続いた日本の心のふるさとを尋ねるとは、農耕や漁業を通した生活と四季の移り変わりや日々の繰り返しの中で、心に届く癒しのリズムや自然や生命の営みに対する畏敬や感謝の気持ちを表していることばではないかと想像する。日本の伝統的な祭りや文化がこのことと深くかかわっていることを考えると、その心は今も続いているとはいえ、都市化や核家族化、機械化、情報化の中で減少し見えにくくなっている。子どもの誕生という神秘的な営みによって誕生してきた子どもたちの生きる力に、驚きと敬いをもって保育していくことは、子宝思想が強いといわれる日本の子育ての心のふるさとを尋ねることでもあろう。

- ② 情報技術の発達が目覚ましい、園便りや園の計画、報告書や名簿などの書類の作成、中には教育ロボットや ICT そのものの教育がなされている園もあり、保育の世界に深く入り込んでいる。このような社会の発展に対応する知識や技術を遅れずに身につけることも求められるが、科学の進歩は胎児や乳幼児の姿を私たちに見せてくれることとなった。特に脳科学の発達が目覚ましい。保育のプロである保育者の養成に当たっては、保護者に話すことができるような、子育ての根拠からの学習も求められるであろう。もちろんそれに伴う保育技術や人間性がなければならないが、保護者との信頼関係を生み出すためにもこの学習が必要であろう。
- ③ それぞれの長所を生かす教育は、一人ひとりを大切にする教育の原点ともいえる。それぞれの人間が何か個性と呼べる特性を持っており、それを学生も教師も見つめ、認め、伸ばしていこうとする姿勢はどの教科にも、どの教育場面にも求められるものであろう。

(3) 具体的な教育内容

- ① 遊びの文化を取り扱う教科、土や畑や生き物と関わる教科、宇宙や地球と生命の一体性の認識に関わる教科、幼い子どもと関わる教科、日本の伝統文化を取り扱う教科では、特にこの「日本の心のふるさとを尋ねる」を念頭に置いた教育を実践していけるものと考ええる。
- ② 近代科学の進歩に関する現在の教科としては、情報技術に関する講義及びパワーポイントなどでの発表を伴う授業が対応していると考えられる。脳科学の進歩に関しては、保育原理を中心とした保育内容に関する教科の中で対応している。
- ③ 長所を伸ばすことの取り組みは、受容と承認を前提としたすべての教科の中で組み込まれているところであるが、音楽・体育・美術・児童文化・人間関係などのコース制により、自分の得意なものを直接的に伸ばす教科としては保育・教育指導法がある。

(4) 今後の課題と考察

- ① 学生が講義や生活の中で、日本の心のふるさとを尋ねる文化を感じ取ることができる環境の整備を行うことと、授業の中で意識的に取り組むために、教育プログラムとして立体的に構築していくことが求められていると感じる。
- ② 情報技術をはじめ近代科学が保育現場でも駆使されていることを考えるとき、実際の場面でどのような機器や技術が使われているかを調査研究したうえで、それに対応できる具体的な技術や知識の修練が、教育内容に求められるところであろう。さらに、近年特に注目を浴びている脳科学と保育の関係性を考えるとき、教育研究にこのことがさらに織り込まれていく必要があると思われる。

- ③ 長所を生かした学習の延長線上に位置づけられているサービスマーケティングの充実や、個々の授業の中で、個人の長所を受けとめて伸ばしていく、受容と承認の教育について、教育の質の向上とともに検討していかなければならないと考える。

4-3 体と心と呼吸を整える

(1) 言葉の根拠

1971年度の純真高等学校卒業アルバムに載っている福田昌子のことばに「一日に一度は体を整えましょう。一日に一度は心を整えましょう。一日一度は呼吸を整えましょう。」というものがある。

このことばは高等学校を卒業する若者へ発せられたことばではあるが、人の生活において生涯大切にされるべきものであろう。4-1でも取り上げたが「人間らしく」に警鐘が鳴らされるこの時代に、人間性の回復のための方法として提唱されたことばと思われる。

(2) こども学科の教育内容等への示唆

こども学科はほとんどの学生が保育者となって巣立っていく。子どもとかかわり、園の業務を行う中で、腰痛や肩こり、肘の炎症、神経性の胃腸炎など様々な病気と対峙しなければならない。学生の将来を考えると、「一日に一度は体を整えましょう。一日に一度は心を整えましょう。一日に一度は呼吸を整えましょう。」を実践する意志や技術や習慣を養成することが養成校の責務であると思われる。

特に心で起こる体の病のことを考えるならば、個々の子どもに寄り添い、保護者への対応や同僚保育者との人間関係などにおいて、多大な心的ストレスが生まれることが予想される。浅い呼吸はストレスが解消されずに、血液・リンパ液の流れや幸せホルモン（セロトニン・オキシトシン）の分泌を悪くし、体の機能を歪めてしまうことになると言われていいる。そういう意味では、この体と心と呼吸を整えることとはバラバラに存在するものではなく一体的に考えていかなければなるまい。一人の人間が、もともと1個の細胞から始まったことを考えるならば当然のことかもしれない。

(3) 具体的な教育内容

卒業アルバムにこのことばが載っていた純真高等学校では、現在のカリキュラムの中で、必修の剣道をはじめ茶道や箏の授業が行われている。体を整え、心を整え、呼吸を整えることに繋がる教科であると考えられる。

こども学科では、保育・教育に関する実技・演習科目が多いため、体育系や心理系の教科目の中でも一部取り組まれているが、一般教養科目の中の「純真ゼミナール」「体育実技」「礼法マナー」で取り組まれている。

①「純真ゼミナール」では、『茶道』が2コマ（4時間）実施された。

②「体育実技」の中で『ヨガ』（ヨガ風ストレッチ）が1コマ（2時間）実施された。

③「礼法マナー」の中で、『座禅とお茶』が1コマ（2時間）近隣の寺院で実施された。

(4) 今後の課題と考察

こども学科の現行の取り組みでは、「一日に一度は」という意志や習慣化は残念ながら図られていない。保育者があるいは人間が、生涯継続して取り組むことができる基礎を作るためには、ある程度継続した取り組みの中で、体や心や呼吸に対する自己変革の体験もしくはそれに近い感覚体験が必要になるであろう。その方法としては、茶道、華道、香道、アロマ、剣道や合気道などの武道、ストレッチや体操、ダンスなども考えられる。その中でも、体と心と呼吸を整えることを一体的に取り組むことができるものの一つとして「ヨガ」を取り上げて考察する。

身体運動・体育としてヨガを取り上げている大学は筑波、早稲田、慶応、九州大学をはじめ多くのところで開設されている。そのシラバスから教育内容を概観する。

九州大学では、『身体運動科学実習Ⅰ』の科目で健康に関する諸問題、リラクゼーション運動の意義と実践方法および姿勢改善のためのピラティストレーニングの原理と実践方法、ストレスに適切に対処するためのヨガや呼吸法の実践方法、コミュニケーションスキル等について学習します。」となっており、「姿勢の改善」「ストレス対処」「呼吸法」がとりあげられている。

早稲田大学のシラバスは『スポーツ実習Ⅰ(1単位)』の科目で古くて新しい東洋の叡智ヨガ・『世界重要無形文化遺産』とも言えるヨガが、現代人のカラダとココロのセルフ・リセットの技法として世界で注目されています。インドで5千年以上前に発祥したYOGAをそのまま行う解釈と、時代や暮らし方、生き方の状況変化とともに時代と場所に適応進化させて行う解釈とがある。その古典ヨガと現代ヨガのバランスをとったヨガを本講座で行う。」となっており、「カラダとココロのセルフ・リセット」ということで体を整え、心を整えることが目的となっている。この後の文章では「全身を平等に調え開発する目的で呼吸に合わせてアーサナ＝動禅をし、身心を立体的に刺激する基本アーサナのマスターを目指す。」となっており、やはり呼吸法が取り上げられている。

純真短期大学こども学科でも、自らの力で体と心と呼吸を整えて、子どもたちと健康な心と体で向かい合うことができる保育者養成を行わなければならないと考える。

純真ゼミナールや体育実技で継続的・計画的に取り組むことにより、一生涯の健康の維持増進という生涯体育の視点からも意義のある取り組みになると期待される。

その内容は切り刻んだ断片の紹介ではなく、身につくほどの深まりが求められる必要がある。目的のためには落ち着いた空間が求められるところであろう。その場合に、内側から自分を知る茶道や香道や武道で求められる集中と解放の体験は生じるであろうが、深い瞑想(メディテーション)までを求めるのかは検討する必要があるだろう。

福田昌子がこのことについてどこまで求めていたかは不明である。関連があると思われる資料は、大法輪(昭和28年11月号)という仏教関係の雑誌に、寄稿の依頼を受けてこたえたものがある。質問内容の二つ目は、「靈魂の存在を信じられますか、信じられましたら、それはどんな形のものとお思いになりますか。またその靈魂とあなたの信仰とはどういう関係にありますか。」というもので、これに対して「人間が五官では感じることの出来ない靈魂によって、生活に反省が与えられ、感謝と愛について教えられます。」と記述されている。

己を空しくして、小我を離れたときに、生活を自省的に見つめることができ、感謝と愛を感じることができるということなのかもしれない。

4-4 人間のもっとも美しい姿をしっかりと見て勉強する

(1) 言葉の根拠

福田学園 40 年誌に当時「じゅんしんようちえん」の職員が、福田昌子理事長は暇をみては幼稚園を訪れ、まるで観察するように熱心に子どもたちを見つめ「何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿をしっかりと見て勉強しなさい」と言ってあったと記述されている。

このことばには、二つの内容が含まれていると考えられる。一つは、「(子どもは) 何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿である」ということ、二つ目は「(子どもの) 姿をしっかりと見て勉強しなさい」ということである。この世に生まれた子どもは純真無垢な姿である。しかし人間は、発達とともに、やがて人間のもっとも美しい姿(純真さ)から遠ざかることとなる。従って大人である保育者は、子どもの姿をしっかりと見ることによって、いつも人間の美しい姿(純真さ)を反映できるよう、勉強しなさいということになったのではないかと推察される。

(2) こども学科の教育内容等への示唆

① 子どもは人間のもっとも美しい姿

地球のシステムにゆだねて生きることができる他の生命と違い、人間は膨大な判断の座である新皮質を手に入れた。子どもは発達とともに、やがて人間が手に入れたこの新皮質により、地球のシステムから離れて、自ら善悪の判断をする存在となる。この判断の方向性によっては、打算、損得、差別などの利己的、自己中心的な思考が生じ、人間のもっとも美しい姿(純真さ)から遠ざかる可能性をもつこととなる。従って判断の方向性に、いつも人間の美しい姿(純真さ)が反映できるように、純真な子どもの姿に触れ、自らを省みることである。さらに保育者や子どもの周りにいる大人に求められることは、乳幼児期の子どもに、純真な子どもらしさを十分に発揮できる機会を用意しておくことであろう。

子どもの姿を「何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿」として捉える考え方は、子どもを「大人になっていない、人間として未熟で何もわかっていない存在」として捉える考え方の対極にあると考えられる。この性善的な子ども観は宗教改革やルネッサンス以降の児童中心主義の教育思想や日本の子宝思想を想起させる。

中世ローマの古い教育に対する新教育の流れの中心的思想家であるルソーはその著『エミール』の中で「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につくとすべてが悪くなる。」と性善説からの子ども観を述べている。さらにフレーベルはその著『人間の教育』の中で「子どもの成長発達において、永遠の法則が何の妨げもなく働くときには、他の自然界と同様にその働きは善であり、従って教育においては、注意と保護を加える必要はあるが、決して命令的、規定的、干渉的であってはならない」と述べ、他の自然界と同様に働いている永遠の法則は善であるという立場

から、その保育・教育の方法を提言している。創立者のことばはこれらを包括することばであると考えられる。

保育者を養成するこども学科には、「(子どもは) 何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿である」という子ども観に立脚し、乳幼児の保育・教育の原点として、保育者養成のカリキュラムを作成していかなければならないと考える。

先にあげたフレーベルは、「Kommt,lasst uns unsern Kindern leben!」（私たちの子らに生きようではないか!）と機会あるごとに訴え、この子ども達の純真な心によって、全ての人の人間性を回復し、社会や国そのものを変革していこうとする壮大な構想を持っていたといわれている。福田昌子のことばと理念に深く通じるものを感じる。

② 子どもをしっかりと見て勉強する

人間は本や人の言葉から学ぶことは多い、しかし「百聞は一見に如かず」で、実際にその場へ行って、子どもとかかわり、子どもを見ることによって学ぶことはより一層大きな学びとなる。「(子どもの) 姿をしっかりと見て勉強しなさい」とは、子どもの教育に携わる者が、保育者から子どもへという一方通行的な教育に陥ることなく、人間の原点である子どもの姿と触れることにより、相互に高めあう存在であることを示唆していると推察される。

（３）具体的な教育内容

何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿をしっかりと見て勉強する機会は、２週間の幼稚園実習Ⅰ、２週間の幼稚園実習Ⅱ、１０日間の保育所における保育実習Ⅰ、１０日間の施設における保育実習Ⅰ、さらに１０日間の保育所又は施設における保育実習Ⅱ・Ⅲ、計５０日に及ぶ実習によって提供されている。さらに幼稚園の観察実習や入学時のフレッシュマンキャンプにおける保育園訪問などがある。また近隣の保育所・幼稚園の子どもが来学して、学生が、自らの学びを活かして作った保育空間で、子どもたちに楽しんでもらう「こどもまつり」や「こどもフェスタ」、学んだことを保育園や幼稚園、施設や子どもプラザなどで、サービスラーニングとして提供することにより、子どもと触れ合う機会が作り出されている。これらはカリキュラムや年間行事として位置づけられている内容である。これ以外にも、子育て中の親子が多目的演習室でサークル活動をしている様子や学内のレストランで食事をしている場面、さらには保育園児が学園内で遊ぶ様子に出会うため、子どもを見る機会は日常的に用意されている。

（４）今後の課題と考察

子どもと触れ合う機会は多く用意されているといえよう。そのいずれの機会においても、子どもの姿を「何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿」とであると意識的に観察し、感じ取るための手立てが必要になると考える。観察実習も含め、実習のねらいの中に明文化し、事前教育において具体的な内容を教育することも必要になるであろう。実習記録においても、そのことに触れる記述欄の設定もしくは、記入への意識付けが求められることになるであろう。特に事後指導においては、各実習の事後指導及び保育・教職実践の振り返りの事項において、深く考える項目の設定等も検討しなければならないであらう。

う。実習以外の科目においても、「子どもは、何事にも汚されていない、人間のもっとも美しい姿である」ということからのアプローチを再検討し、卒業時までのカリキュラムとしてさらに構成していくことが望まれる。

4-5 助け合う温かな教育環境

(1) 言葉の根拠

福田昌子は著書『私たちの生活と政治』の中で、「私達は日本の国を平和な国にし、私達の家庭生活を朗らかに楽しくするためには、・・・国民も、お互いがもっと助け合う気持ちにならなければなりません。

助け合い運動は赤い羽根週間だけに限りません。国民の中には、自分たちの税金で、貧乏な人の生活を見てやったり、他人の病気を治してやるのは嫌だと言う人がありますが、このような考え方は間違った考えであります。」と述べている。

昭和30年前後の社会状況の中で「婦人団体が児童福祉の立場から託児所を要望してもまた母子福祉の線から授産所、母子寮を希ってもなかなか建てて貰えず生活保護法はあっても、今の制度では貧困者は援われないのであります。」という現状が書かれ、親と生活ができない児童やひとり親家庭に対する援助など、社会的弱者に対する社会保障制度の確立への思いが熱く語られている。

(2) こども学科の教育内容等への示唆

真に社会に奉仕し得る保育者の養成にあたって、利己から利他への価値観を育てるためにも、お互いに助け合う温かい教育環境を作っていくことが求められるであろう。

そして、広い視野と勇気をもって、すべての人の安定した明るい生活の実現の為に手と手を取って努力していく、温かい心と強い心を持った保育者の養成に、あくまで努めなければならないであろう。

(3) 具体的な教育内容等

グループ活動による演習やロールプレイングなどを多く取り入れ、協働による成果が満足感を持って得られ、その成果に対して温かい評価やねぎらいが十分に与えられること。

講義における、受容の態度（拒否や否定を行わない）や、いいこと探しを優先する姿勢（そのあとにもっと良くなるための工夫の提案）・・・これが求められるのは教員の姿勢でもあり、学生間の姿勢でもある。間違いや失敗、マイナス面に対して、先に目が行く姿勢からの転換を、授業や生活を通して図り、相手の気持ちや思いに寄り添いながら良いものを目指していく心や態度を育てていかねばならないと考える。

(4) 今後の課題と考察

ゲームやSNS、音楽に興じるスマホなどのICT機器の発達によりコミュニケーションの原点といわれる、挨拶や笑顔が、目と目を合わせてなかなかできにくい時代に突入しようとしているといわれている。子どもと保護者や保育者との間でも課題となっているこのことを考えるとき、あえて、当たり前であった挨拶や笑顔、目と目を合わせた語らいなどを、改めてテーマとして掲げ、人間性にあふれる保育者養成校の校風として形作ることが喫緊

の課題になると思われる。そのための具体的な取り組みの方法や受容の態度を大切にしながらグループ活動の導入方法など、授業方法の改善や教師の質的向上を、お互いの協力によって作り出していかなければならないと考える。

5 おわりに

純真短期大学の創立者が福田昌子であったことは実に大きな幸運であったと感じる。保育者を養成することも学科の教育の在り方を研究するにあたり、創立者のことばによって明確な方向性と多大な勇気を与えていただいた。これから先、50年100年後の人類がどのような発展を遂げているかわからない。しかし、おそらく赤ちゃんが母体から生まれてくることは変わらないであろうし、その後、赤ちゃんには温かい環境が求められることも変わらないであろう。変わらないでほしいという願いでもあるが、その時に、おそらく変わらずに、乳幼児の保育に大きな働きをしているであろう保育者の進むべき方向性に対して、大きな示唆を与えてくれることばを、創立者が残していただいていることに、心から感謝をしたい。